

草花で祝う、 再生の節目

五節供のひとつ、上巳^{じょうし}は旧暦3月上旬の最初の巳の日、新暦では4月上旬、年によっては20日前後にあたる頃。「巳」は十二支の6番目で、冬の眠りからさめたヘビが顔を出す、春の季節を示しています。ヘビは人間と特異な関係を築いてきた摩訶不思議な生き物で、日本でも、古代から水の神や山の神、雷神として、あるいはその使いとして、ありとあらゆる神話や伝説に語り継がれてきました。脱皮をくり返し再生する生命力の強さが、子孫繁栄のイメージとつながるためでしょう。縄文土偶や弁才天など豊穡や財福を司る女神の頭にヘビを戴く像が少なからず見られ、ヘビは男性神とされる一方で、女性との結びつきがとても強い存在であったことがうかがえます。

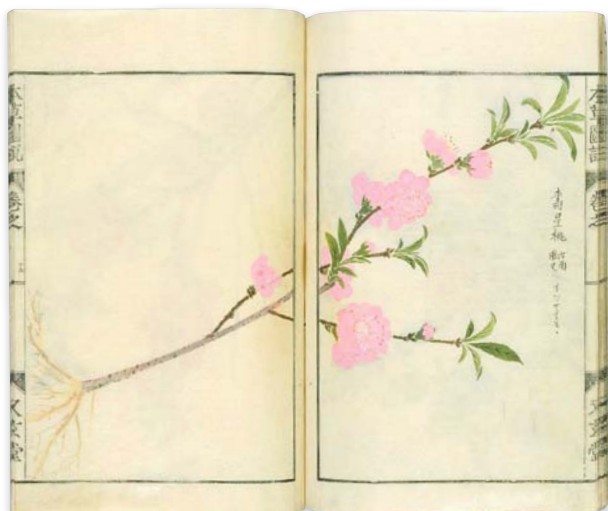
「ヘビが脱皮をすることく」活発な成長を祈る女の子の祭り、桃の節供は、今ではこの上巳の時期に収合されています。中国では、上巳のような季節の変わり目には禍^{わざはひ}をこうむりやすいとして水辺で邪気を祓う習慣がありましたが、それが日本に伝わると人形^{ひとがた}にけがれを移して流す「流し雛」などに結びつき、豪華な雛人形を飾る風習へと変わっていったのです。

その雛壇を飾る桃は古くから仙木として珍重され、橘^{たちばな}（蜜柑^{みかん}の古種）も常緑の葉が不老長寿のシンボルとされてきた神聖な植物です。この春はたとえ雛人形を飾らなくとも、古に

ならって桃や橘の草花を生け、節供を祝ってみてはいかがでしょう。この時期、ホルモン機能を活性化させ、後につづく夏から冬の季節を乗り越える力を蓄えるためにも、花を愛で、体に取り入れることはとても有益です。桃や桜、葦^{あし}の花を塩漬^{しほづけ}にしたものや、露^{あき}の臺^{たい}などをいただくで眼・鼻・舌で春を感じ、自然に合わせたリズムで、ゆっくりと体を目覚めさせていきたいものです。

文 井戸 理恵子

いづりえこ／民俗情報工学研究家。1964年、北海道生まれ。多摩美術大学非常勤講師。節句の会「エノコト・節句の響応」をはじめ、伝統儀礼や風習の意味を民俗学的に解明し今に具現化する提案を行う。著書に『暦しきたり・エノコト 日本人が大切にしたいつくしき暮らし』など。



「春を告げる桃の花」

イッサイモモ「本草図説」
所蔵／東京国立博物館
Image: TNM Image Archives